

に、西嶋氏が本書で説かれた二十等爵制論には、なほ従いかねる節々が多い。しかし、爵制をとりあげて、ここまで内容を組織化し、爵制の本質を説き、皇帝の個人身身的支配体制の成立を伝統的な爵觀念の発現とみなした点等々については、すくなくとも、爵制にかかわる範圍内のこととして理解するとき、これは正しい理解の仕方であつたと思われる。

秦漢帝国の実体は、依然として究明の余地を残していよう。爵制で全体を割り切ることの困難は、すでに各氏の批判によつて明らかとなつたが、さりとて、爵制以外の要因を提示して秦漢帝国の本質を説明しつくしている学説も、まだ成立しているとは思われない。西嶋氏の指摘した爵制は、構成要素の一つにはちがいない、伝統的爵觀念の強調は重要な意義をもつてはいるが、これですべてを割ることは、他の、特定の觀念ないしは制度的事実によつて割り切る立場とともに、一種の帝王機関説的印象を受けはしないだろうか。そして、それで終つてしまふ慮れがありはしないだろうか。中国古代史において、著るしく目立つ多種多様な秩序の存在の中でも、上下関係を構成する秩序であるならば、それは爵制秩序においてみられたような性質が、いずれの場合にも含まれていたのでないだろうか。秩序を秩序として納得させるための理論の根拠は「天意」「神意」であり、「先王の制」であるとき、この三者は絶対のものであり、現実の人間関係を外側から規制していたかにみえる。けれども、人間関係を規制する力を、なぜ「天意」や「先王の制」に求めなければならなかつたか、という

批評と紹介 神田

古代中国人の思考の仕方を社会関係との関連において探索してゆく立場は、別個に成立できるはずである。人間的であると考へられ易い、統属関係の成立に際して結ばれる「約」とても、古代中国の場合、絶対的な「神意」の介入によつて、相対的とみえるものが、実は一方的なものに転化されることが、条件となつていたのではないか、なぜそうなつていたのであるうか、などと、余事に聯想を駆りつゝ、果たしえぬ責、西嶋氏の力作たる本書の紹介批評を終りたい。(昭和三七・一〇・二五記)

(東京、東京大学出版会、一八六一年、五八七頁)

謝国楨編著

### 明清筆記談叢

神田 信夫

本書の著者謝国楨氏は、周知のやうに明末清初史研究の第一人者で、夙に「明清之際党社運動考」(一九三四年 商務印書館刊)を刊行し、戦後直ちに「清初流入開発東北史」(一九四八年 開明書店刊)を世に問ひ、中華人民共和国成立後は「清初農民起義資料輯録」(一九五七年 新知識出版社刊)を編輯したり、「南明史略」(一九五七年 上海人民出版社刊)を著したりするとともに、旧著の「黄梨洲学譜」や「顧亭林学譜」の改訂を試みてゐる(一九五六、五七年 商務印書館刊)。そして氏はまた史籍そのもの

のに対して非常に興味をもたれるやうで、その造詣も極めて深く、曾つて北平図書館から「清開国史料考」（一九三一年）や「晚明史籍考」（一九三三年）を刊行されたことがあり、これらは明末清初史の文献についての指針として、今日に至るまで多くの研究者に少なからぬ便益を与へてゐるのである。

このたび刊行された本書は、全体の書名に冠した「明清筆記叢」なる篇を先づ第一に置き、次に「明清史料研究」以下十篇の文章を収めてゐるが、それらは殆どすべて明清時代の書物に関する記述である。しかし最初にある「筆記談叢」がやはり本書の中心であつて、頁数からいつても全体の半分に近く、明清全代にわたる凡そ四十八種の筆記についての所見を収録してゐるのである。

いつたい筆記すなはち隨筆には、ずるぶん荒唐無稽な記事も珍しくないが、しかし他方、官府の文書や編纂物のやうなオーソドックスの文献にはみられない独特のよい史料がまま見出されるものである。さうしてその史料の価値は、オーソドックスの史料に比べてむしろ勝る場合も少くない。民国になつて「筆記小説大観」や「清代筆記叢刊」のやうな筆記を集めた叢書も刊行されたが、新中国においても筆記の類が重視されてゐるとみえ、近年中華書局から新たに「元明史料筆記叢刊」や「明清筆記叢刊」といふシリーズが刊行されてをり、謝氏の「筆記談叢」にも取上げられてゐる「草木子」や「湧幢小品」を始め幾種かの筆記が既に新版として出てゐる。ところで筆記、殊に明清のものには版によつて内

容にかなりの相違のあることが珍しくなく、しかも古典のやうに書誌学的研究が殆どなされてゐないので、実際に利用するに際してどのテキストによるべきかなかなか明らかでない。さらにさうした筆記の類は単行本の他、いろいろの叢書に入つてゐるものが多く、すべての異本を網羅的に集めるのは甚だ困難なのである。

さて謝國楨氏は、本書の前記によれば筆記の類の書物を読むのを好まれるやうで、明清両代の筆記稗乘につき、凡そ史乘の欠を補ひ、政治經濟文化及び風土人物の事実に関するものがあれば、真偽を扶摘し、分類鈔存し、出処を註明して「明清筆記資料彙編」なる書物を作らうとしてゐられるとのことである。そしてその筆記の書物一部ごとに内容と使用価値を記した提要を作り、「彙編」の前に置く計画で、今回の「筆記談叢」はこの提要の基礎となるべきものであるといふ。謝氏は「筆記談叢」において、四十八種の明清の筆記につき、一つ一つその著者の略歴やテキストについて説明した上で史料の価値を論じてゐる。その場合、最近学界で喧しい新しい問題に視点を置いてゐるのが注目される。すなはち社會經濟史上の諸問題について取上げるところが最も多く、土地問題、賦役、農業・手工業・商業等の諸産業、農民暴動・奴妾等の社會問題、農村及び都市の社會生活や風俗、なかも蘇州・杭州・南京などに関する史料を筆記の中から抽出してその書物の史料の価値を論ずるのである。その他、明清史上の重要な問題である倭寇や広東の平南藩の致富の実態とか、遷界や逃人、或ひは白蓮教の乱などいろいろ多方面にわたつてゐる。ともかく単なる形式

的書誌学の無味乾燥な解説と異り、記事内容の史料的価値を問題にしてゐるので、なかなか興味深く、明清史の研究者は一読すべきであらう。しかも取上げてゐる筆記は、明初の葉士奇の「草木子」から清末の文廷式の「聞塵偶記」などに至るまで明清時代全体にわたつてゐる。そしてそれらの筆記には謝肇淛の「五雜俎」や李斗の「揚州面筋録」の如き著名なものもあるが、余り名を聞かぬ珍しい書物も少くない。

「筆記談叢」の次には「明清史料研究」「明代辺防史乗十種跋」「叢書刊刻源流考」「三省礦防考跋」「彭茗齋著述考」「陳則震事輯」「張南垣父子事輯」「關於全祖望結埼亭集之題跋」「平景孫事輯」等の諸篇が列べられてゐるが、これらは既に以前に発表されたものの再録である。すなはち金陵學報、北平圖書館善本叢書第一集の解説、明清筆記叢刊の霞外攬居の附録などとして書かれたもので、戦前戦後を通じて長年にわたつて書かれたのがこのやうに一本にまとめられ、まことに便利である。各篇の末尾には、最初起稿の年次とその後補訂した年次が明記されてゐるが、事実、初め発表された文章と比べてみると、新しい史観による修正のほか随處に訂正増補のあとがみられる。例へば「明清史料研究」は曾つて金陵學報三ノ二（一九三二年）に発表されたものであるが、その後の研究や新しい史料などかなり著しく増補されてゐる。ただ一二気になるのは、満文老檔の冊数を一百七十九冊とする誤りをそのまま踏襲してゐることである。これは一百八十冊の誤りで、もと金

梁氏が「滿洲老檔秘録」の自序に一百七十九冊と誤つて書いたのに謝氏が扱つたのであるが、その後、金毓敏氏は「滿文老檔考」（国立瀋陽博物院籌備委員会彙刊一期）で特に謝氏のために論じてその誤りを正してゐるのである。これなどぜひ訂正して頂きたかつたと思ふ。またこの篇の中には朝鮮人の記載を紹介して、「佚名撰『旧老城柵中日録』、申忠一『建州紀程図記解説』（李民案解説）」とあるが、もとよりこれは申忠一の「建州紀程図記」とそれを解説した故稱葉岩古博士の「旧老城」、李民案の「柵中日録」の三者を混同したのである。金陵學報の方にはただ「佚名撰柵中日録」とだけある。増訂の結果かへつて誤を犯したものと云へよう。なほ日本人の研究論文をも紹介してゐるが、三十年程前の状態をただ抽象的に記すに過ぎないのはいささか遺憾である。

最後の一篇は「明清筆記稗乘所見録」と題し、後記によれば一九六一年二月に執筆されたものであるから、最も新しい文章である。これは初めの「筆記談叢」と同じく明清時代の社会、経済、政治、階級闘争、民族闘争、風俗、文化、芸術、民間の工芸などについて記してゐる筆記稗乗十数種の紹介である。そして謝氏は最後に筆記稗乗の史料的価値の重要性を強調し、その利用のための工作として、標点整理して筆記叢刊を刊行し、内容を取捨選択して筆記稗乘滙編を編成し、各事項別に各種各様の資料鈔存を作るべきことを提唱してゐる。実際、明清時代になると書物の数が庞大で、筆記稗乗などに一々目が届きかねる有様であるが、謝氏のいはれるやうにぜひ整理されたいものである。前述のやうに氏

は「明清筆記資料彙編」を作らうとされてゐることである。その一日も速かに完成するのを切に祈る次第である。

(北京、中華書局、一九六〇年、一九六二年再版、三七〇頁)

李定一著

## 中美外交史 第一冊(一七八四—一八六〇)

百 瀬 弘

近代中国の対外関係史に関する西洋人の研究が、古典的名著たるモースの「中華帝国の国際関係」以来、数多く公にされていることは言うまでもなく、最近十余年間において、いわゆるウエスターン・インパクトの問題とも関連して、アメリカにおける中国近代史研究の重要な課題となつてゐるのも周知のことであろう。

と同時に、人民中国において、現実的な問題意識すなわちアメリカ帝国主義との闘争にささえられたアメリカの中国侵略史の研究が進められ、卿汝楫の概論「美国侵華史」(第一巻、一九五二年)から、未刊文献を含む朱士嘉編の「十九世紀美国侵華檔案史料選輯」(上下二冊、一九五九年)に至るまで、各種の成果があらわされていることも、また注目されている。筆者に紹介の義務を課された李定一の名著の第一巻は、その対象と年代においても、多或少の差はあれ、一九三〇年代までの英文文献と中国側の一般の

な資料に拠つて書かれたものであることは、右の卿汝楫のものと同じであつて、どちらも、最近におけるアメリカやわが国での研究成果はとりいれていない。しかもこの「中美外交史」はアメリカの革命前後の時代から現在までにわたる、いわゆる概説であり、第一巻は北京条約まで述べているので、専門的個別研究の紹介の形式をとることができないから、まず、卿汝楫との対比の視野から、その特徴を明かにしておこう。本書の著者は一九五三年に「中国近代史」を公にし、現在台湾大学を中心とする近代中国史研究グループの重要なメンバーであることからうかがわれる。このような立場にある著者が、本書の序文に明記されているように、一九四九年の合衆国政府白書や朝鮮動乱に関する世論に刺戟されて「中美両大民族の接触からその後の発展の歴史」を体系づけて世に紹介しようとす意図から書いたものであり、台湾政府の「国家長期発展科学委員会」の補助によつて完成したというからには、海盜的商業資本の中国市場侵略↓砲艦の威力による不平等条約の強制↓太平洋天国彈圧による侵略政策の拡大・中国封建勢力の擁護というアメリカ資本主義の中国侵略を理論づけている卿汝楫の著作と全く対照的なものであることは、指摘するまでもないであらうし、さらに、それが台湾における中国近代史研究の一面をあらわしているとも見てもいいであらう。「中美外交史」第一冊には、人民中国で発表された論著も史料集も一切参照してないばかりでなく、後進国の侵略という資本主義の否定的な面はまったく問題